

「こふき話」に続いて、「おふでさき」11号が記されている。そのお歌をみていくとき、欠けている個所がみられる。11号のお歌80首のうち、51がなく52があって、それ以降53～68が欠けている。つまり、記されているお歌は、1～50、52、69～80の計63首である。なお、その記されたお歌は、写し違いか、あるいは、写本のもとになったものが違っていたのか、その語尾等において、相違がみられる。それらについて、最初のところを比較対照しておこう。Aが「活字本おふでさき」、Bは「近愛本」である。

- A 1 むなさきへきびしくつかへきたるなら
月日の心せきこみである
- B 1 むなさきへきびしくつかへきたるから
月日のこゝろせきこみてある
- A 2 このさきハ一れつなるにだんへと
みのうちさハリみなつくである
- B 2 此さきハ一れつなるだんへと
みの内へ皆さわりつくて有
- A 3 どのよふなさハリついてもあんぢなよ
月日の心糸らいをもわく
- B 3 どのよふなさわりついてもあんぢなよ
月日の心いかいをもわく
- A 4 みのうちにさハリついてもめへへの
心それへみなわけるでな
- B 4 みの内へさわりついても名への
心それへ皆わけるでな
- A 5 しんぢつにをもう心とめ糸への
しやんばかりをふもいゝるとを
- B 5 信じつに思ふ心はめいへの
しやんばかりををもいいるとを

こうした写し違い、あるいは読み違いは、おそらく、「おふでさき」の原本からの筆写本でなく、写本の、また写本、あるいは、もっと人の手を経たものであったことを推測させる。お歌が11号全部揃っていないという事実が、そのことを裏付けることになるだろう。人の手から手へと写す作業が重なるところ、そこにだんだんと脱落や相違がでてくるのは、ある意味当然のことといえるのである。この写本の元になったものが、どれであるかを特定することは困難である。ただ、斯道会系統、甲賀大、中野大、あるいは、とくに河原町大に所在する、いくつかの写本を手にすることがあれば、おふでさき写本の流れ、人の手から手へという状況を読み取ることも可能であろう。

こうしたことは、次に記されている「おさしづ」の写しについても同様のことがいえるであろう。この「おさしづ」の写しは、32丁～129丁に及ぶ。ただ年代からいえば、明治24年11月～29年4月にわたる。すると、この文書の表紙に記されている、明治23年4月という表記は、筆写された最初の年月であると考えるとよいだろう。おそらく、この年月は「神の古記」を記した頃までの年月ではないかと思われる。あるいは、「おふでさき」の十一号のお歌も、その中に含まれるかもしれない。

ここで、筆写された「おさしづ」について、最初のところを『おさしづ書』(以下、正本と記す)と比較しておきたい(写しのおさしづに番号を付しておく)。

1、明治廿四年十一月十五日 午後一時刻限

この写しは、正本にはない。

2、明治廿四年十二月十九日夜 本席様身上御障りに付御願
さあへとうゆう事や とうゆう事がわかろうまい なにほといそがしい(32才)

いそがしいへへ中に きよにハとうしよ きよにハとうしよ
きふんわるい。わるけれハ日々はこふ事できん とうなる
日々も処 世界よりくる処 はこんて それへよる処たすけ
それ日々つくす 所々の里によりて 一日の日ハ なんでも事
上ハをさまるまい よをへてあるふ おもいかけなき人つん
てくる たゝ一つの里によりて 十ノ物に一つとゆう どうも
ならん 此里(32ウ)

きゝわけをかにやならん とふゆう事はしめるやら わからん
一日の所々とりあつかへ 一日の日しとしきりや 一時間かゝ
るかしらんといふ をゝくよりくる 一日間二日三日としやん
とうらにやならん これからとりあつかい 一日の日十日三十
日や。いかなる事であるふとをも とをてもはこひかけたら
はこはにやならん きれんように はこはさにや「ならん」
きれやせて あらかたしもたら、きれるかと(33才)

をもふ きれやせん 一つの手ハつなくよう 一つへおさへ
にやならん 一つてつなかにやならん きつた事なら きれた
処から火かはいる 風かはいる 水かはいる こわいおそろし
いへ まことづく里かあれば とんな事でもこわいこととは
ない こうなればとうなるやしれん けうこうとおもふている
中に とうやしれんと 又一っさづけへといふてある 一日
何人と□からん とふく(33ウ)

にわたしてある処 一ッあらため さつけたしてある これか
ら先ハ一度定めた事上ハ 一日一度三人三十日ことと 九度の
里を定めた つもりつもりた事情たけハゆるしたる なん時な
り共 一日一ッとしておさめたる ならん処からはこんた里
生涯しらん間ハしよかいとゆへん かるいおもい里ハないなれ
と 心の里によりてかるくなる だんへたねをまく はこん
た里ハ(34才)

日々受取てある これたけへしたらとゆうた事てハならん
のばすたけでハならん とうも世上の里とりたりすれハ とん
な里かわくやらわからん 日々つくしてうれしい つくさすし
てくさり種をまけハ 日々帳面をよこしているよふな物や う
れしい一ッの種ハ一粒万倍二なるで 日々におさまつてくるで
是ハ実の実やないか ほおくかうそか 世上の里を(34ウ)
みればうたかいあるまい 一ッの心もたにやならん こんやこ
れたけ はなしてをくによつて あすハすくとせきはこふで

こうしてみていくとき、『おさしづ書』の正文と、かなりの異同をみるのである。この点については、稿をあらためて考えていくことにする。